

## 出べそ(臍ヘルニア)について

### 門別診療所 下村優樹

「生まれたときは気にならなかったけど、最近気付いたよ。」

「なんか最近大きくなっているような気がするな。」

「痛みはなさそうだけど、見た目よくないよね。早く処置した方がいいんだろうか？」

この時期、牧場の方々からよく聞かれます。臍ヘルニア、皆様にとっては“出べそ”という方が馴染みある言葉かもしれません(写真1)。臍ヘルニアはサラブレッド当歳で2%の発生率との報告がありますが、普段現場を回っている私の個人的な感覚ではもっと発生率が高いように思います。



(写真1)

毎日馬の手入れをする中で、見て触ることによって発見されることが多いでしょう。脱出したものを戻すことができる還納性ヘルニアと自然には戻らない非還納性ヘルニアに分けられます。小さいヘルニアであれば、生まれて数週間のうちに自然に小さくなり矯正されることが多いですが、時間の経過とともにヘルニア輪(溝)の大きさと輪郭が拡大することもあります。経過観察をした上で、自然矯正が見込めな

い場合において非外科的または外科的処置を行うか診断する必要があります。直径5cm以上の輪(溝)の臍ヘルニアにおいては何もせずに矯正される傾向が低く、直径7~10cm(大人の指3~4本)以上で7~9ヶ月齢になっても自然矯正されないものにおいては外科的矯正が選択されます。また、ヘルニア輪周囲の熱感、触診痛、浮腫、そして疝痛症状がみられる絞扼の可能性が示唆された場合も外科的処置が必要となります。

前記したサイズよりも小さく、ヘルニア内容物(腸管)を押し戻しても再びヘルニアとなり外観が変化しない場合は競走馬としての外見を考慮し、ゴムリングを装着して対処します(写真2)。余分な皮膚に装着し、瘢痕組織の形成を刺激することによって閉鎖を容易にすることができます。ただし、装着後激しい疝痛症状が現れた場合は腸管の閉塞を疑い、ゴムリングの装着を中止すべきなので、装着後数時間観察することをお勧めします。装着後1週間ほど臍部に消毒液を噴霧し、様子を見ましょう。数週間で壊死組織が脱落し、瘢痕組織もいずれ消失し患部のふくらみも平坦になります。



(写真2)

繁殖シーズンもほぼ終わりに近づいています。無事に生まれてきた愛馬の成長を見守りながら、何か気になることや疑問がある場合は獣医師にその都度ご相談下さい。